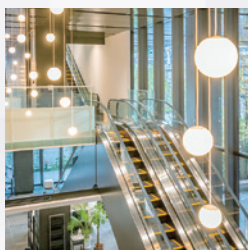


Si-report

Socio-Intelligence report



専修大学のビジョンと現状

2021
vol.16

SENSHU UNIVERSITY

建学の精神と21世紀ビジョン

「社会知性の開発」

社会知性(Socio-Intelligence)とは

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である。

専修大学は、1880(明治13)年、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の地で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。4人の創立者は、帰国後、経済学や法学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立します。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知見を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによって極めて困難な状況に直面

しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、自ずと道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」を21世紀ビジョンに据えました。今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題は山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であると同時に、「専修大学が創り育てる知」でもあります。



サスティナブルな未来に向けて

SDGsへの取り組みについて

専修大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています

専修大学は、21世紀ビジョン「社会知性の開発」の下、教育・研究・社会活動を通じて「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に貢献します。

専修大学21世紀ビジョン「社会知性の開発」は、学生が自らの目標に向かい、全力で打ち込んで得た知識や技能を、自分だけのものとして完結させず、社会が抱える諸課題の解決のためにも積極的に活用しようとするマインドを醸成すべきという教育目標です。SDGsの理念は、持続可能性という必要条件を満たしたうえで、世界が2030年を目途に解決しなければならない諸課題を地球に生きる我々自身への問いかけとして、17の目標(169の具体目標)の形で可視化し、その目標達成のための行動を求めるといえるものです。このようなSDGsの理念は、「社会知性の開発」をめざす専修大学の教育目標とシンクロしており、本学が取り組む「社会知性の開発」は、SDGsの達成にも繋がるものと考えております。SDGs達成の目標期限とされる2030年は、専修大学創立150周年とも重なります。来る2030年には、専修大学がSDGsのために何をしてきたのかを胸を張って自覚できるよう、取り組んでまいります。

専修大学長 佐々木 重人

持続可能な開発目標(SDGs)とは

「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」は、国連サミットで採択された2030年までの国際目標です。国連加盟193か国が協同的なパートナーシップの下、計画を実行することを確約し、「地球に生きる誰一人取り残さない」という誓いを基本としており、先進国に限らず開発途上国も取り組むユニバーサル(普遍的)な目標として位置づけられています。開発目標には「経済」、「社会」及び「環境」の3つの側面から、17の目標と、各目標に紐づく169のターゲットが設定され、人々の具体的な行動を促しています。



21st. century vision

SOCIO-INTELLIGENCE



▶ Siとは…

「社会知性:Socio-Intelligence」の頭文字[S][I]と「SENSHU Intelligence」の頭文字[S][I]を表現しています。本誌は、専修大学のビジョンと現状をレポートしていきます。

▶ シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学と21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の「S」を意味します。ブルーの曲線は大平原を、緑の球体は地球を表し、本学で「社会知性」を育んだ人材が、世界に羽ばたき、活躍するさまを表現しています。



▶ 専修大学マスコット「センディ」

獅子の姿に鳳の羽を配した本学のマスコットは、若者たちに無限の可能性を持つ未来へ力強く羽ばたいてほしいという思いが込められています。



▶ 専修大学におけるSDGsへの取り組み

専修大学では「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けて、教育、研究、社会貢献活動等、様々な取り組みを展開しています。

専修大学におけるSDGsの取り組みは、
公式Webサイトよりご確認いただけます。

https://www.senshu-u.ac.jp/social/senshu_sdgs/



SDGs TOPICS 専修大学は、「JAPAN SDGs Action Platform(主催:外務省)」、「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム(主催:内閣府)」に参画しているほか「かながわSDGsパートナー(主催:神奈川県)」にも登録されています。諸機関とのパートナーシップの下、SDGs達成に向けた活動に取り組んでいます。

地方創生 SDGs
官民連携
プラットフォーム

Japan.
Committed
to SDGs





佐々木 重人

専修大学長

松永 賢次

ネットワーク情報学部長
(情報科学センター長)

金子 洋之

副学長(文学部教授)

コロナ禍における専修大学の取り組み

— 学生の学びを止めないために —

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け 対策本部会議を設置

佐々木 新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、2020年4月7日に発出された「緊急事態宣言」により学生はキャンパスでの対面授業が不可能になりました。この緊急事態に機動的に対応するため、各学部長を中心メンバーとする対策本部会議を組織しました。最初の議題となったのが「オンライン授業をどうするか」でしたが、私自身その分野の知見がなく困っていたところ、松永先生をはじめネットワーク情報学部の先生方がすでに行動を起こし、オンライン授業始動の準備を進めてくれたのです。遠隔授業を研究する望月先生が本学の情報機器インフラを前提としたオンライン授業を設計し、各学部や研究機関の教員に進め方を教えるセミナーを自主的に企画してくれたおかげで、学内くまなく普及することができました。膨大なマニュアルの用

意も大変心強く、「習うより慣れろ」をキーワードにそれを駆使しながら全学部の教員が準備できたことは、オンライン授業を迅速にスタートできた要因だと思っています。

オンライン授業の開始に向けた準備と その時に直面した課題

松永 望月先生とは小中高校が臨時休校になった2月末頃からオンライン授業の必要性について毎日チャットで意見交換していました。まず問題は、同時に約1,000人しか使用できない本学所有のオンライン授業システムの対応能力でした。同時に約1万人使える手段が必要だと情報科学センターの職員と議論し、世界的に使用されているGoogleのシステムを中心にすることにしました。学生のインターネット環境や機器のばらつきも大きな課題でしたが、Googleアプリにより、PCでも4G回線のスマートフォンでも受講できる

ようになります。本格展開する前にはネットワーク情報学部の教員間で練習もし、その知見を情報科学センターと共有しました。全学生のスムーズな受講のために電話で問い合わせできる窓口が必要だろうと、授業開始と同時に、情報科学センターにサポートセンターも開設しました。

佐々木 国立情報学研究所から大学のデータダイエットも求められました。限られた通信許容量を、より必要とする初等中等教育などに回してほしいという要望です。当初の我々のイメージとは異なることになりましたが、大学に課せられた依頼には協力すべきだと判断しました。しかしながら、学生の情報通信環境を考えますと、双方で回線容量を目一杯使うようなことは元々難しく、資料を画像でアップしたり課題を文字ベースで発信したりと、抑え気味のオンライン授業になりますので、自然とデータダイエットに貢献できたと思います。

金子 オンライン授業開始当初は、教員、学生の双方とも戸惑いや負担が確かにありました。マイクのスイッチを入れ忘れて喋り続けてしまうなど、私も失敗は相当しました。ただ、回数を重ねれば双方の共通のやり方が確立していきます。対面授業と違い、オンライン授業は意外と1対1の関係を維持できることがわかり、この点はオンライン授業の魅力だと思いました。対面しなければできない授業もありますが、じっくり説明を聞き理解する必要のある講義科目においてはオンライン授業のほうが効率的な面もあると考えます。また、板書においても優れており、オンライン上の板書は次々書いても全て記録されますので、残された板書のデータをアップすれば学生は後から見返すことができ復習にも便利です。



新しい時代のオンライン授業に向けて

佐々木 オンライン授業の開始当初は慣れない授業や施設費に対する不満が寄せられました。そこで6月下旬に全学部学生を対象としたアンケート調査を実施しました。41.8%という一般的なアンケート調査として高い回答率からわかったことは、75.8%は通信量無制限型のWi-Fiや4G回線の環境下で受講していたこと。一方、10.6%は従量制4G回線で受講していたことが分かりました。通信容量に制限のある学生が一定数いることが分かり、後期に向けて「情報通信環境整備及びプリントサービス支援金(15,000円)」を全学生へ給付することとしました。学生のストレスの多さも把握でき、特に学内での人間関係が築けていない1年生は後期の授業ガイダンスを対面で行ったり、ストレッチで体をほぐせるような休憩時間をオンライン授業中に設けたりするなどの改善策も生まれました。一方、オンライン授業を全面否定する声はほぼないこと、学年が上がるほどオンライン授業肯定派が多いことがわかり、全学年等しく対面授業を展開する必要はなく、1年生は対面授業を手厚く、就職活動などで多忙になる3～4年生はオンライン授業を主流にする

といった方向性も見出すことができました。オンライン授業改善のヒントがアンケートから数多く集まりましたので、これを活かすべく、金子副学長には後期に向けたオンライン授業のデザインヒント集を作成してもらいました。

金子 各教員にフィードバックできるよう講義の内容に応じた提案をしています。大別すると、1点目はデータダイエットへの配慮で、大抵の講義科目では教員のライブ映像は重要ではありませんので、不必要なライブ映像は避けてほしいという提案です。2点目は、大量の課題が課せられ手が回らないというアンケートからの声を受け、課題量の調整の提案。3点目は、資料提示のみ、課題提出後にリアクションがない、などという一方通行な講義の改善の提案などです。

松永 様々な制約があったかもしれませんが、先生方の工夫により、専修大学独自のオンライン授業がデザインできるようになりました。他大学のオンライン授業は、ビデオ会議システムを使う同時双方向型、教員が動画を作りサーバーに上げるオンデマンド型、資料をサーバーに上げる資料配布型と3タイプに分けられていることが多いのですが、専修大学ではそのような類型にとらわれず、Googleのシステムで利用できる様々なアプリケーションを、授業内の活動にあわせて組み合わせます。最先端技術ではない代わりにシステムの安定性が高く、データダイエットの面でも有効です。90分授業の中で、例えば最初にサーバーに上げた資料を読み込み、次にクイズやアンケートにより理解状況を確認し、最後にビデオ会議やチャットを使ってディスカッションをしましょう、などと、教員一人一人が、限りあるネットワーク資源を考慮しつつも、教育効果を上げるための方法を真剣に考えて授業を設計することになりました。これは今日の大学教育には重要なことであり、私たち教員にとっては様々な工夫のし甲斐があります。もう一度自分の授業スタイルを見直す機会に、ひいては授業改革に結びついたと思います。



ポストコロナにおいて専修大学が これから目指すべき方向とは

佐々木 2021年度は対面授業の割合を増やし、1年生は週3～4日程度、2年生は週2～3日程度、3～4年生は週1～2日程度、通学できるよう授業を組んでいます。感染対策の“見える化”も徹底し、教室内のCO2濃度の測定や、授業補助員が適宜教室の換気を行うなど、学生も教員も安心できる仕組みづくりを進めています。オンライン授業のスキルを得てその良さを知った今、もはやオンライン授業は臨時のものではなく、ポストコロナは対面授業とオンライン授業が両輪のようになるでしょう。オンラインの常態化による新たな可能性を考えると、一つには、COIL (Collaborative Online International Learning: オンライン国際共働学習) があります。本学には素晴らしい国際交流協定校があり、オンラインならその授業を容易に提供し合えるため、大学間ネットワークが進むはずで、現地留学の前段階としてオンライン留学が語学鍛錬の場として効果を発揮するでしょうし、VRを用いて現地を歩きアバター同士で会話するなんてことも実現するかもしれません。ポストコロナは様々な可能性が一気に加速すると思います。例えば、6時限(18時15分～)以降の授業展開の少ない時間帯を活用し、一線活躍する実務家にオンライン講義を聞いてもらうような試みも考えられます。キャンパスへの通学は困難でもオンラインを利用すれば授業へのアクセスは容易になりますし、本学の人的資源や立地のメリットを活かしながらオンライン授業が進化すると考えます。

もちろん、21世紀ビジョン「社会知性の開発」を可視化するSDGsの取り組みや、神田神保町という街の中で教育のみならず文化の発信地になりたいという思いも変わりません。特にポストコロナでは地域住民のコミュニティづくりに携わることも必要だと考えます。ポストコロナで求められることに積極的に関与して、大学としての存在意義を発揮していきたいです。

知の発信のための研究開発

専修大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています



新規国際交流協定を締結

国境を越えて広がる知のネットワーク



イギリス・ヨークセントジョン大学と国際交流協定

専修大学はイギリスのヨークセントジョン大学と国際交流協定を締結しました。同大学はイギリス北部の古都ヨークの中心地に位置し、1841年に教員養成学校として設置された歴史ある大学。人文社会科学系の4学部があり、なかでも語学・言語学部には日本語と日本文化を学ぶ学生が多数在籍しています。協定に基づき、学生の交換留学をはじめ学術資料の交換、教員・研究者の交換、学術交流などを行っていきます。

台湾・国立台北大学商学院と国際交流組織間協定

専修大学商学部および商学研究所は台湾の国立台北大学商学院と国際交流組織間協定を締結しました。台湾の研究機関との組織間協定は初となります。台湾の危機管理については、今回の新型コロナウイルス感染症に関する対策でも国際的に注目されており、協定締結により、危機管理面での先進的活動の研究が期待されます。



「食」を通じたコミュニティ再生に関する研究

商学部・渡辺達朗教授が東京都と共同事業

「専客万来一孤食から救食へ」

商学部・渡辺達朗教授の「食」を通じたコミュニティ再生に関する研究が、東京都と大学との共同事業に採択されました。「専客万来一孤食から救食へ」と題した研究では、オンラインで大学・学生・食品関連企業・コミュニティをつなぐプラットフォームを構築し、食品ロス削減とコミュニティ再生に取り組みました。

東京都と大学の共同事業とは

Community × SDGs

東京都と大学の共同事業は、「SDGsの推進と持続可能な都市・東京の実現」を目指し、都が募集したものです。実施テーマは「Community×SDGs(コミュニティ・バイ・エスディーズ)」。

公開シンポジウム ―コロナ禍のもとでの私たちの暮らしと食生活―

専修大学と一般社団法人サステナブルフードチェーン協議会(SFA)が、東京都環境局と連携し、公開シンポジウムをオンラインで開催。お笑い芸人でごみ清掃員でもあるマシガンズの滝沢秀一さんによる講演「ごみ収集の現場で見た食品ロス」に続き、シンポジウムでは、食品卸大手の国分グループの平賀織江さんが通常の流通には乗らない完熟したカボスを活用し、新開発に結びつけた自社の取り組みを紹介。愛知工業大学教授でSFA代表理事の小林富雄さんは、ポストコロナ社会の食品ロス対策に言及。学校給食における食品ロスの問題にも触れ、食事時間を長く確保することで、食べ残しが減った京都の小学校の事例を紹介しました。商学部・渡辺達朗教授が司会を務め、「食」を取り巻く課題について意見交換が行われました。シンポジウムの終了後には、渡辺ゼミとSFAが共同して構築している、食とサステナビリティに関するオンラインコミュニティプラットフォーム「ハニコミ」の内容説明が行われ、渡辺ゼミからはレシピチームとカレーチームの2チームが発表。レシピチームは、廃棄されがちな野菜を使った料理レシピを配信・普及していくための取り組みを、カレーチームは農家と神田周辺の有名カレー店をつなぐ取り組みをそれぞれ紹介しました。

※一般社団法人サステナブルフードチェーン協議会(SFA)とは…食品ロス削減を中心とする課題解決によりフードサプライチェーンの持続可能性を目指す、食品産業関係者と有職者の緩やかなネットワーキングの場を提供するコンソーシアムです。



左からマシガンズ・滝沢秀一氏、商学部・渡辺達朗教授、国分グループ・平賀織江氏、愛知工業大学・小林富雄教授



スポーツ研究所がストレスの予防・解消法を公開

専修大学スポーツ研究所(佐竹弘靖所長)がスポーツリテラシーの授業を履修する1年次生2277人を対象に、運動・生活行動に関するウェブアンケートを実施。その結果、新入生の27%が抑うつになりうる、またはすでに抑うつがあることが分かりました。スポーツ研究所では、運動習慣などに関するアンケートを2014年度から実施。2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きいと思われる新入生のストレス状況を把握するため、軽うつ病発見の手がかりの一つとして行われる簡易テストをとり入れた自己診断チェックシート(東邦大式SRQ-D)を追加して行われました。スポーツ研究所では結果と合わせてストレスの予防・解消法をウェブで公開。「自身の状況を認識して、うまくストレスをコントロールする方法を知ってほしい」と呼びかけました。



ゼミにおける国際交流の取り組み

ウェブ会議システムを用いて海外の大学との遠隔授業や共同授業を実施

文学部・板坂ゼミが韓国・大田大学とオンラインで共同授業

文学部日本文学文化学科の板坂ゼミが、韓国・大田大学で日本語と日本文学を教える関内勲教授(平13院文博)の教室と共同授業を開催。共同授業では、現代の若者文化を相互に発表しました。板坂ゼミでは、10年以上前から授業にITを導入し、海外の大学との共同授業を通じ、学生たちの国際性やコミュニケーション能力を高めてきました。



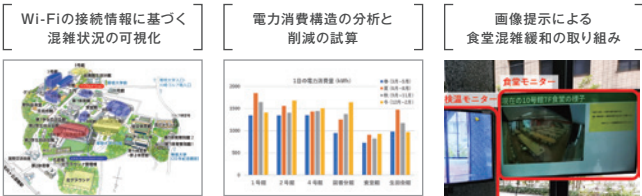
専修大学・石巻専修大学・ベトナム国家大学ハノイ人文科学大学(USSH)が合同ゼミを開催

専修大学、石巻専修大学、国際交流協定校のUSSHを結んだオンライン合同ゼミが開催されました。各大学の頭文字をつないで「HISジョイントセミナー」と題されたゼミでは、毎年USSHから特別聴講生を受け入れていた人間科学部の嶋根克己ゼミ、石巻専修大学人間学部の杉浦ちなみゼミ、USSH東洋学部日本語学科がSDGsにかかわる研究報告や質疑応答を実施。新型コロナウイルス感染症の影響で海外の大学へ学生を派遣することが難しい中、オンラインでつながり、相互理解を深めました。



スマートキャンパス実現に向けて

専修大学情報科学研究所(植竹朋文所長)が、川崎市国際環境技術展に出展。学内のデータサイエンス研究プロジェクトの成果として3研究を発表しました。感染症予防として「密」を防ぐことが求められている中、研究ではWi-Fi接続状況分析による教室利用、画像提示による食堂の混雑状況を可視化することで、学内の混雑緩和を図り、感染予防への活用が可能に。念頭にあるのは、スマート化アイテムの導入により、教育施設を取り巻く課題の解決を目指す「スマートキャンパス」。研究は今後も続き、大学の資産の効率的な運用のほか、学生や教職員の行動変容も促し、誰もが快適に過ごせるキャンパスの実現を目指します。



神奈川県「大学発・事業提案制度」に採択

神奈川県の「大学発・事業提案制度」は、県内に所在する大学からの独創的な提案に基づき、大学と県が連携・協働し、地域課題の解決に向けて取り組む制度。2020年度は、SDGsの認知度向上及び取り組みの推進に向けて、大学と県が連携して行う事業が募集され、商学部・岩尾詠一郎教授による専修大学からの提案「SDGsの浸透・普及のための啓蒙活動～神奈川県の中小企業を対象に～」が採択されました。採択事業は2021年度に社会知性開発研究センター／中小企業SDGs研究センター(研究代表:岩尾詠一郎商学部教授)にて実施します。



専大生のチカラ

※学生の学年、情報は2020年度時点のものです。

専修大学は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています



商学部・神原理ゼミ 「大麦ストロー」活用をPR

商学部・神原理ゼミの3年次生が、海洋プラスチックごみ問題の解決に向け、環境に配慮した商品のプロモーション活動を実施。そのうちの一つ、大麦の茎から作られる「大麦ストロー」は再利用可能で、廃棄時には土に混ざって肥料としても使用可能。SNSによる情報発信のほか、商品誕生の背景を紹介するチラシや商品カードなどの販促ツールを作成し、農林水産省で開催された展示会で披露しました。

さらに、従来にない活用方法として大麦ストローを細工し、ヒンメリと呼ばれる北欧のインテリア小物の制作にも挑戦。試行錯誤を重ね、最終的には定番のモビール(吊るし飾り)に加えて、風鈴やアクセサリースタンドも完成させるなど、大麦ストローの新たな魅力の発掘・発信を行いました。



国連WFP協会主催「ゼロハンガーチャレンジ」で入賞

国連WFP協会が実施した「ゼロハンガーチャレンジ」の食品ロスゼロアクションコンテストで商学部の学生が運営するInstagram「VEGE COMM(ベジコミ)」が入賞。「ゼロハンガーチャレンジ」は、10月16日の世界食料デーを挟んだ9～10月に食品ロス削減の取り組みをSNSに投稿すると、1投稿当たり120円が途上国の学校給食支援に寄付される仕組み。ベジコミはベジタブルコミュニティの略で、食を通して、農家や飲食店・地域住民・学生がつながるオンラインコミュニティの構築に向け、野菜を使ったレシピや野菜の保存方法などを発信。余りがちな野菜を使った簡単なレシピや、食品ロスを防ぐ買い物の仕方などを投稿しました。



Instagramアカウント「VEGE COMM」



みたかビジネスプランコンテストで アイデア部門奨励賞を受賞

株式会社まちづくり三鷹が主催し、企業支援を通じて地域の活性化を推進する「みたかビジネスプランコンテスト」に経営学部・馬場杉夫ゼミが参加。東京都三鷹市で盛んな農業に着目し、農業と消費者のマッチングプランを提案し、アイデア部門で奨励賞を受賞しました。



余剰野菜救済のためのカレープロジェクト 季節限定野菜カレーの販売に協力

食品ロス削減について関心を集めるために、商学部の学生による「余剰野菜救済のためのカレープロジェクト」が神田キャンパスなどで開催されました。これは東京都との共同事業に採択された「食」を通じたコミュニティ再生に関する研究の企画の第2弾で、商学部・渡辺達朗教授の授業を履修する学生が、余剰野菜などを活用した季節限定野菜カレーの販売に協力しました。



川崎市・中小企業の SDGsに関する取り組み調査

経済学部・遠山浩ゼミが、川崎市内の中小企業の経営者にSDGsに関するヒアリングを行い、各社の既存事業がSDGsで定められた17の目標のどれに該当するかを検討しました。その後、検討結果を冊子にまとめ、「SDGsの観点からビジネスモデルを見直すことが、企業価値の向上につながる」と指摘。冊子は「川崎市中小企業SDGsへの挑戦」として、川崎市経済労働局などで配布されました。



大学生CSVビジネスアイデア コンテストで企業賞を受賞

商学部・石川和男ゼミの3年次生チームが大学生CSVビジネスアイデアコンテストで企業賞を受賞しました。同コンテストは、デジタルマーケティング支援事業を手掛ける株式会社メンバーズの主催。持続可能な社会の実現に向けて、企業が提示したテーマに対し、大学生がCSV(=社会課題をビジネスで解決する事業やプロモーション)ビジネスアイデアを提案するものです。石川ゼミのメンバーは学習塾を運営する湘南ゼミナールの「100年後の未来をつくる教育」に挑戦。大きなテーマに戸惑いながらも、「人種差別を解決して多民族共生社会をつくる」という案にたどりつき、見事、企業賞に輝きました。



学生ビジネスコンテストで努力賞を受賞 食品ロス防止プランを考案

一般社団法人学生サポートセンターが主催する「学生ビジネスコンテスト」に経営学部・目黒良門ゼミが参加しました。同コンテストは独創性や市場性、社会性などの観点で審査が行われるもの。参加したメンバーにとって、ビジネスプランの作成は初めての挑戦でしたが、店舗が抱える廃棄間近な商品の情報をウェブで発信し、割引価格で販売するプランを考案。全国より応募のあった160件以上の中から努力賞に選ばれました。



SDGsチャレンジプログラムを初開催

SDGsに対する学生の理解を深め、さらには他者に影響を及ぼす存在に成長することを期待して企画された学内コンテスト「SDGsチャレンジプログラム」を初開催しました。SDGsの達成に貢献するアイデアを応募するアイデアコンテストでは、教科書の再利用プランを提案した商学部・奥瀬喜之ゼミの「Share Study Project」が学長賞を受賞。具体的なアクション(実践報告)を応募するアクションコンテストでは、生田キャンパスに隣接する生田緑地を舞台に親子で取り組む自然体験企画を行った、ネットワーク情報学部・杉田プロジェクト2020の「いろ色!～自然たんけん隊～」が学長賞に輝きました。

アイデアコンテストには16件、アクションコンテストには8件の応募があり、書類審査とプレゼンテーション審査の結果、8チームが入賞。審査には、学内のみならず企業や行政、海外の大学関係者にも携わっていただき、SDGsにふさわしく多様な視点から評価が行われました。



SENSHU SPORTS & TOPICS

※学生の学年、情報は2020年度時点のものです。

専修大学は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています



ATHLETICS

陸上競技部

7年ぶり69回目の箱根駅伝出場



①予選会をチームトップで快走する木村純仁さん ②本選出場を決め胴上げされる長谷川淳監督 ③陸上競技部のユニフォーム
④箱根駅伝で東京・大手町をスタートする選手たち ⑤育友会の全国の支部から寄せられたメッセージ入りのハンカチ ⑥2区を走る主将の茅野雅博さん

予選会を総合10位で突破—全員で掴んだ箱根の切符

2020年10月17日、東京都立川市の陸上自衛隊立川駐屯地で行われた第97回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会で、陸上競技部が総合10位(10時間33分59秒)となり、7年ぶり69回目の本選出場を果たしました。予選会はハーフマラソンの10人の合計タイムを競い、上位10校が本戦への出場権を得ます。11位との差は18秒の僅差で、序盤から積極的にレースを展開した作戦が実った形となりました。1年次生の木村純仁さん(経営1・佐久長聖高)がチームトップとなる1時間2分44秒と力強い走りを見せるなど、陸上競技部のスローガン「伝統への挑戦 Return to HAKONE」の言葉通り、全部員の挑戦が成果を遂げました。

陸上競技部のユニフォームスポンサーにアマタケ

2020年度から大学駅伝のユニフォームにスポンサー制度が導入され、株式会社アマタケが陸上競技部のスポンサーとなりました。サラダチキンで知られるアマタケは、前社長が校友会名誉会長の甘竹秀雄氏(昭33商経)という縁があり、これまで様々な面で本学を支援していただいています。

ご声援ありがとうございました

7年ぶりの箱根路は険しく、総合20位の結果となりました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、沿道での観戦・応援が自粛となりましたが、テレビ・ラジオやインターネットなどを通じて、熱い声援を送っていただいた皆様に心よりお礼申し上げます。箱根駅伝を終えて、2区を走ったキャプテンの茅野雅博さん(商4・鶴翔高)は「最初で最後の箱根駅伝は、たくさんの皆さんの支えがあって走り切ることができました」と感謝の言葉を述べました。

ハンカチで駅伝応援

予選会を前に、育友会の全国の支部から応援メッセージ入りのハンカチが届けられました。ハンカチには育友会本部や職員も寄せ書きし、つなぎ合わせてのぼり旗に仕立てられ、陸上競技部に送られました。新型コロナウイルス感染症の影響で、予選会は無観客での実施となりましたが、全国からの応援が後押しとなり、念願の本戦出場を果たしました。



SPEED SKATE

スピードスケート

期待のルーキー・蟻戸の躍進続く

蟻戸一永さん(経営1・白樺学園高)が、2020年10月の全日本スピードスケート距離別選手権、男子10,000mで優勝し、ワールドカップ派遣選手団に選考されました。さらに2021年1月の全日本ジュニアスピードスケート選手権、男子5,000mで日本ジュニア記録を更新し優勝。JOCジュニアオリンピックカップに選出されるなど躍進しました。



CANOE

カヌー

大久保・喜友名ペアが大学日本一に輝く

全日本学生カヌースプリント選手権、カヤックペアの200mで、大久保泰成さん(商4・分水高)・喜友名泰志さん(商3・沖縄水産高)ペアが優勝。専修大学が個人種目を制するのは、24年ぶりの快挙です。



大久保泰成さん(中部右)と喜友名泰志さん(中部左)

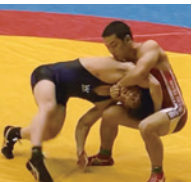


WRESTLING

レスリング

吉永が初の学生タイトルを獲得

全日本大学グレコローマン選手権、67kg級で吉永信太郎さん(経営3・玉名工高)が優勝し、初の学生タイトルを獲得。終始隙を見せない試合展開で、準決勝を10対0、決勝を4対0の完勝となりました。



吉永 信太郎さん(右)

各界で活躍する専修人

● TABLE TENNIS／卓球

木下マイスター東京の及川瑞基選手(令2商)が全日本卓球選手権大会男子シングルスで初優勝



● TABLE TENNIS／卓球

卓球部の木村香純さん(経営3・四天王寺高)がTリーグの木下アビエル神奈川に加入(写真提供/木下アビエル神奈川)



● FENCING／フェンシング

フェンシング部OGの菊池小巻さん(平31商)が、全日本フェンシング選手権女子フルーレで4年ぶり2度目の日本一を獲得



● BASEBALL／野球

プロ野球ドラフト会議で佐藤奨真さん(経営4・関東第一高)が千葉ロッテマリーンズから育成4位指名



● BASKETBALL／バスケットボール

バスケットボール部の西野曜さん(経済4・近大附属高)がBリーグのサンロッカーズ渋谷と選手契約



● BASKETBALL／バスケットボール

バスケットボール部のキング開さん(文3・アレシヤ湘南高)がBリーグの横浜ビー・コルセアーズに特別指定選手として登録



TOPIC ① 神田キャンパスにこだわりの詰まった本格カフェ“SENDAI-Kaffee”がオープン！

神田キャンパス10号館1階に本格派カフェ「SENDAI-Kaffee」がオープンしました。「Kaffee」はドイツ語で「コーヒー」を意味し、ドイツ留学経験のある日高義博理事長のアイデアで命名されたもの。直焙煎の豆を注文が入ってから一杯ずつハンドドリップで抽出するスタイルには学内にも多くのファンがいます。落ち着いた店の雰囲気とぴったりの益子焼の器は、専修大学出身の陶芸作家・藤本左近さん(平14経営)の作。「コーヒーと共に文化を提供したい」というマスターの想いもあり、今後は写真展やブック展など様々な企画を開催予定です。神田キャンパス近辺にお越しの際は、是非お立ち寄りください。



TOPIC ② 専修大学専用学生寮が2棟オープン

専修大学専用学生寮が、神田・生田の両キャンパスの近くにオープンしました。完全個室で家具や備品を完備し、今後は寮生同士の交流イベントなども実施予定。寮長・寮母が住み込む専修大学生の専用寮で、地方出身学生の住まいをサポートします。



TOPIC ③ 元留学生のコーチ氏、イタリアの文学翻訳賞受賞

専修大学大学院の元留学生で、イタリア・トリノ大学教授として日本語・日本文学を研究しているジャンルーカ・コーチ氏(平16院文博)がイタリアで文学翻訳賞を受賞しました。大学院で日本文学を学んだ後、翻訳者、研究者として日本文学を広くイタリアに紹介してきた実績が評価された形となりました。



専修大学在学当時のコーチ氏(左後列)

貴重書ギャラリー

専修大学図書館は、1911(明治44)年創立者の相馬・田尻遷居記念文庫を元に、1912(大正元)年図書館を開設、2012(平成24)年に100周年を迎えました。現在の蔵書数は約190万冊に及び、なかにはフランス革命期の大コレクション(バルンシュタイン文庫)、江戸戯作コレクション(向井信夫文庫)、蜂須賀家旧蔵本、本学ゆかりの方々の旧蔵コレクション、さらには世界の名著・古典と評される図書なども所蔵しています。本貴重書ギャラリーでは、それらの貴重な資料の中から数点を選び、ご紹介しています。

源氏物語(桐壺巻)



源氏物語(桐壺巻)
冷泉為秀筆[康永3(1344)]写
1帖 15.5×14.5cm
重要美術品指定

表紙は菱形十窓唐草紋の金欄で、見返しは金銀砂子散らし模様、料紙は鳥の子、一面十行書の枳形本。本奥書に、1236(嘉禎2)年に為経が藤原定家の証本を借用して書写したものであることが記されているが、実際の書写者は、巻末にある極書や同筆の和歌懐紙から、冷泉為秀の筆跡であることが確認されている。為秀は鎌倉後期から室町初期にかけての歌人で『十六夜日記』で知られる阿仏尼の孫に当たる。足利義詮の歌道師範を務め、吉田兼好や頓阿とも親交があった。本書は現存する『源氏物語』の写本としては古い部類に入る。源氏物語は紫式部による我が国を代表する物語文学の古典。五十四帖からなる物語は光源氏とそれを巡る多くの女性との物語が仏教的輪廻観を背景に、人間の栄光と苦悩に深く思ひめぐらして「もののあはれ」を基調とした世界が描かれている。

募金ご協力をお願い

専修大学の教育・研究活動、学生支援、教育施設設備のため、皆様のご支援ご協力をお願いいたします。

※払い込みには、金融機関・ネットバンク、コンビニ、クレジットカードのご利用が可能です

専修大学・石巻専修大学「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」推進募金

この募金は、本学が進めている事業のうち、国際交流の推進支援、学生スポーツ活動の振興、学生への経済的支援、キャリアデザインプログラム充実支援、学生のボランティア活動支援、教員の研究活動支援等を募金目的の柱としています。また、それぞれの募金目的が、具体的に用途を特定したものととなっています。これにより、皆様が、本学の活動のうち、より強化・充実したいと思われるものを具体的に指定し、支援することができる仕組みとなっております。

お問い合わせ

専修大学募金局

TEL 03-3265-3157
E-mail : bokin@acc.senshu-u.ac.jp

募金のご協力はここから

<https://www.senshu-u.ac.jp/about/donation/method.html>



【専修大学 学長室企画課】

[神田キャンパス] 〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8 [生田キャンパス] 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

Tel: 044-911-1252 Fax: 044-900-7803 <https://www.senshu-u.ac.jp/>

※本誌は、学生・教員へのインタビューに加え、ニュース専修掲載記事や本学HP等を通じて公開された情報を元に編集し発行しています。

本書は[可読性][視認性][判別性]に優れ、年齢・性別に関係なく、誰もが読みやすく、見やすいUD(ユニバーサルデザイン)書体を使用しています。

2021年4月発行